

新生児と乳幼児 苦しみのサイン： いくつかの手がかり



Dr. Anne de Truchis ヴェジネ病院周産期科代表作成

安發明子翻訳/加藤剛制作協力

病院について：

フランスのパリ郊外にある、精神疾患や虐待経験や暴力被害経験、病気や障害のある親の周産期ケアを専門とする公立病院。妊娠4ヶ月までに義務付けられている妊娠初期面談で心理的社会的ニーズがあると判断された親が近隣病院の産科から紹介されてくる。親がケアを受け、妊娠中の赤ちゃんが精神的負担少なく生まれてくることができるよう、そして産後に親が赤ちゃんをよりよく世話できるように親子を支える。親のベッド30床、赤ちゃんのベッド20床、親子のケアと関係性構築のため産後3ヶ月間父も一緒に入院することができる。保健センターのフォロー、保育園、社会家庭専門員の派遣が決まってから退院し、退院後は同じ病院内にある日中病院に週数回半日通う方法で継続的にケアをおこなう。

この資料について：

フランスにおいては産科に専属の心理士がおり妊娠初期から注意が払われ、ケアの必要性があれば対応される。産後の新生児についても、赤ちゃんが小さいほど環境(親)の影響を強く受け、その影響は先々まで及ぶため、赤ちゃんの精神面にも小児科医は気をつけて診察する。

身体のサイン

- 頻脈、まれに徐脈（波がある）、頻脈から徐脈と変動がある
- 酸素濃度の低さ(息が浅い)
- 屈曲反射(足や手の皮膚をさわると反射的に大袈裟なくらいよける)
- 手足や指を広く開いたままている
- 険しい表情：眉をしかめる、目を強くつぶる、口が開いたまま、舌の突出、顎の震え

機能的不耐性

心身の症状

- 消化器：摂取物が口に上がってくる、排便トラブル
- 皮膚：湿疹
- 感染症過敏：特に耳鼻咽喉から病気になりやすい

睡眠障害

- 睡眠・覚醒リズムの確立トラブル
- 静かな不眠症：目が開いたまま天井を見ているなど起きているのに大人を呼ばず、泣かない
- 睡眠を妨げるほど過敏で警戒感が強い(普通は少しの音では起きずに眠る)
- 睡眠が短く分断されている
- 過眠（睡眠に逃避している赤ちゃん）

摂食障害

- 空腹/満腹の食事リズムが定まることが困難
- むさぼるような哺乳、もしくは哺乳が遅い
- 吸うことに喜びを感じていない（ミルクが口から流れ出る、受動的な哺乳）
- 哺乳無関心：赤ちゃんがミルクを要求しない、または要求しても実際に飲まない
- 食欲不振または飽くことのない空腹感

緊張 - 運動トラブル (緊張が普通ではない)

緊張

- 全身の筋緊張、背中をそっている、頭から背骨にかけての緊張、こわばった赤ちゃん、弓形の赤ちゃん、目を大きく見開く
- 全身の力が抜けている、布巾のような赤ちゃん

運動

- 自発的な身振りが乏しい
- 腰が開き、腕がぶら下がり、だらっと開いたまま、丸くまとまらずに手足が出る(普通赤ちゃんは丸くまとまることができる)
- 胴体を動かさずに絶え間なく興奮している、手と足のみ長時間動き続ける
- 偽性モロ＝通常あおむけに寝ている赤ちゃんの頭を持ち上げておろすと、両腕を広げ、閉じ、さけぶのがモロー反射。しかし、調子の悪い赤ちゃんは手を触ったり他のきっかけでモロー反射をする。
- 不随意の震え



自ら感情を整えることができない

慰めることが不可能

抱っこしてもミルクをあげても泣き続ける。1日何度も、長時間。夜泣き始めても、通常15分したら止まる。新生児は2-3分したら止まる。長い間続けて泣くのは通常ではない。

自ら調整できない

注意

- 厳重警戒(誰か来ただけでびっくりする、話しかけたらとても驚く)、または注意散漫
- 視覚的注目：対象物に目を合わせる、光、対話者の眉間など
- 目が合わない、わざと視線をそらす
- 自分に閉じこもっている

感覚

- 感覚過敏、または感覚刺激に反応しない

運動能力

- 絶え間なく興奮している
- 一度習得したことが後戻りする、もしくは習得が遅い
- 自己鎮静しようとする行為
- 舌や唇の吸引、目線が揺れる、同じものを直視し続ける、髪をつかむ、しつこく自分をひっかく

医師による観察

健診をした者は複数、普通ではない点があると気づく

- 乳児の体が緊張している：仰向けに寝ている赤ちゃんの足元に立ち、両手をにぎって起こす。新生児でも頭を支えれば数秒はこちらを見ることができる。腰を折って座る体勢になることができる。

3ヶ月すると、立たせると足をつっぱる。

ところが、異常があると座る体勢をとることができず突然立った姿勢になる。または頭をこちらに向けることができないで後ろに垂れたままになる。

- 赤ちゃんは通常仰向けでガニ股になることができるが、腰が緊張していてガニ股に膝を開かせることができない
- 両手を持って座らせる際に顎が不随意的な動きをする。顎の震えが続く。力が抜けきっていることがある。話しかけても注意を引いても反応が薄い。何度も話しかけをやり直して反応を確認する必要がある。精神的にその場にはいない。
- 仰向けで寝ていて頭を持ち上げると通常であれば意識を向けるが、姿勢が混乱し体がだらっとする。背中を弓形に反らせる。

目が合わず、赤ちゃんに目を合わせるよう促すと、赤ちゃんが努力しても眉毛の線か、おでこを見るが目が合わない。

母が長期にわたる妊娠の否認*を経験した赤ちゃんの特徴

母親が妊娠の否認を経験した赤ちゃんは、睡眠に逃避することが多く、代謝と習得が遅い。あまり食べない、たくさん寝る、生後1ヶ月でも生後数週間のようなだったり、生後2-3ヶ月でも生後1ヶ月のようなだったりする。(小児科で常に赤ちゃんを観察している専門職でないと親ではわからない)。数週間発達にずれがでる。赤ちゃんが状況の変化を待っているような様子を示す。(お腹の中で親に存在が認められていなかったため、生まれても他の赤ちゃんより成長する準備ができていない)

- 新生児反射の継続。赤ちゃんならではの反射や反応が普通より長く続く
- 起き上がらせ立たせたときに足を突っ張ることも成長してからしかできない。運動能力に遅れがある
- 過眠
- 身長と体重の伸びが遅い
- 目を合わせる、笑顔といった習得が遅い
- 人と関係性を築かない、浮遊しているように存在する、誰とも目を合わせない、自分が存在するという点について準備ができていない

*妊娠の否認＝妊娠に気づいていないか、他のことが頭を占めていて妊娠について自覚したり考えたりする余裕がない。出産まで妊娠に気づかないこともある。赤ちゃんも胎内に存在することを認められていないので背中側にへばりついていて妊婦のお腹が出ない、不整出血があったり生理がないことに気づかない、体重の増加や乳腺の肥大がないこともあり、周囲にも妊娠を気づかれにくい。物理的な出産では足りず、生まれるには社会的、家族的、関係性においての文脈が必要、赤ちゃんは母親や周囲の人たちに受け入れられて初めて、社会的にも誕生を迎えることができる。(Tursz 2011, 2015)

注意点：1回のみ、数分間の症状では判断しない。赤ちゃんの様子全体を見て該当するものがいくつもあるかをみる。

